

教育と福祉の連携

～こどもと家庭に一体となって寄り添うために～

「対話」と「実践」の場づくりへのチャレンジ

和歌山県 & 和歌山県教育委員会
「教育と福祉のカタリバ」実行チーム

目次

1. 学校、家庭、地域の現状
2. チャレンジの「きっかけ」
3. なぜ、オフサイトミーティングで取り組むのか
4. 「カタリバ」チャレンジ Stage 1～3
5. 県と教育委員会における連携の実践
6. 教育と福祉の連携 <市町村への展開>
7. 実践事例 1（御坊市立御坊小学校）
8. 実践事例 2（那智勝浦町）
9. 教育と福祉の連携 <県立高校への展開>
10. 実践事例 3（県立有田中央高校）
11. ふりかえり（成果と気づき）

学校、家庭、地域の現状

学校を取り巻く問題の 複雑化、困難化

- 保護者の学校に対するニーズの多様化
- 児童生徒指導に関わる課題の複雑化
- 教員の働き方改革の必要性

家庭教育が困難な 現状

- 核家族やひとり親家庭、共働き世帯の増加
- 生活保護世帯の増加に見られる貧困問題の深刻化
- 子育ての不安や問題を抱え孤立する保護者の増加

地域における教育力の低下

- 少子化、核家族化、都市化、情報化等の社会の変化
- 地域における地縁的なつながりの希薄化
- 地域の間人関係の希薄化

児童虐待

不登校

いじめ、
問題行動等

チャレンジの「きっかけ」

2022年4月 教育長からの問いかけ
「教育と福祉、一緒になって子育て世帯を支援できないか？」

【想 い】 苦しんでいるこどもをその家庭環境の負の連鎖から1人でも、
2人でもいい、切り離せるような取り組みができれば・・・

【問題意識】 教育と福祉の間に「壁」がありそう。それが何かは？？？

→ **オフサイトミーティング「対話の場」でとことん考える**

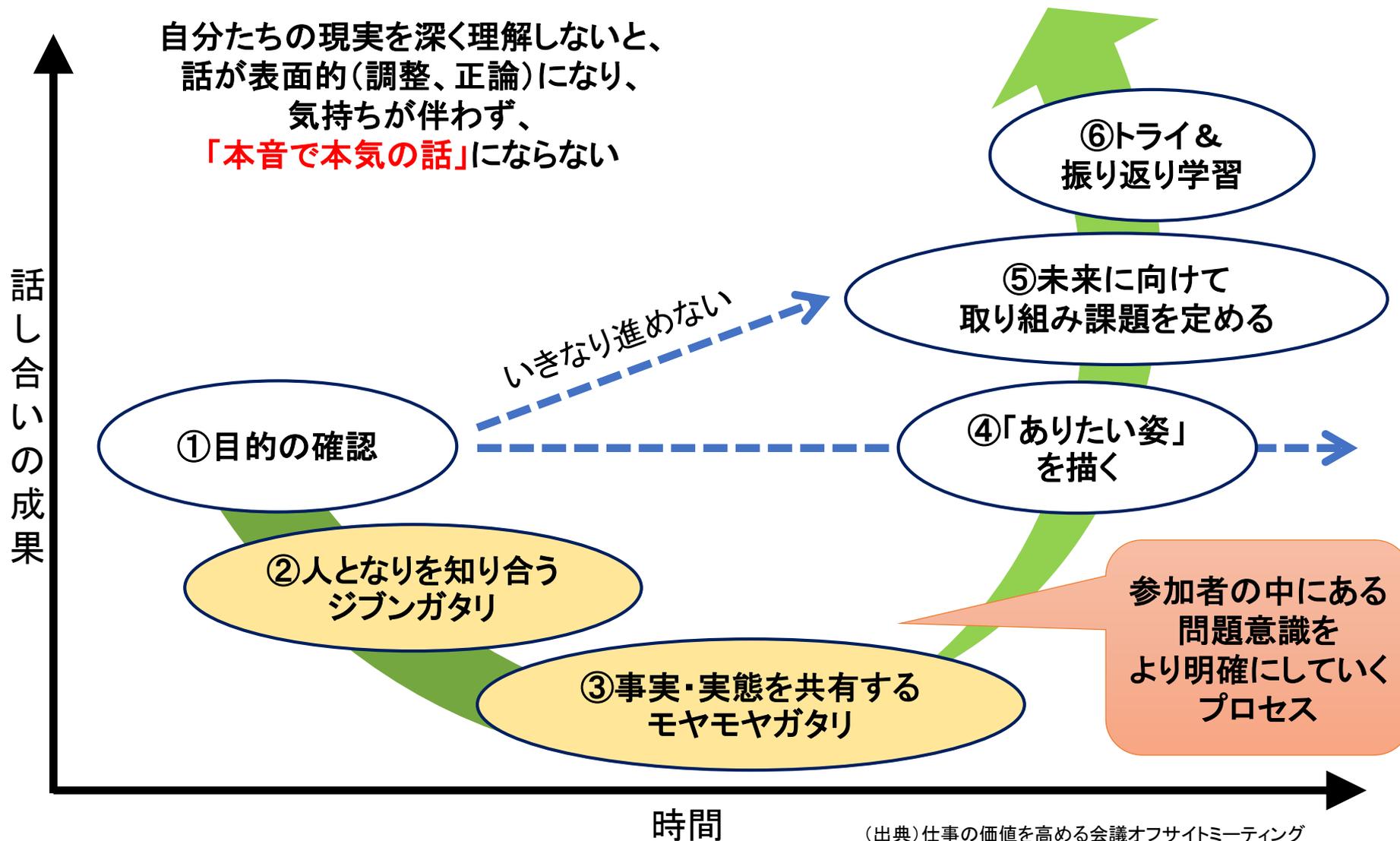
※オフサイトミーティングとは 新しい話し合い方「道具であり手段」
職種や肩書きにこだわらず 気楽に、本気に、まじめに

今ある事業にとらわれずに、現場で実働している人の「感覚」を大事にして
その「壁」=課題の存在を探るところから対話を始めることにチャレンジ！

教育と福祉の「カタリバ」スタート！

なぜ、「オフサイトミーティング」で取り組むのか ①

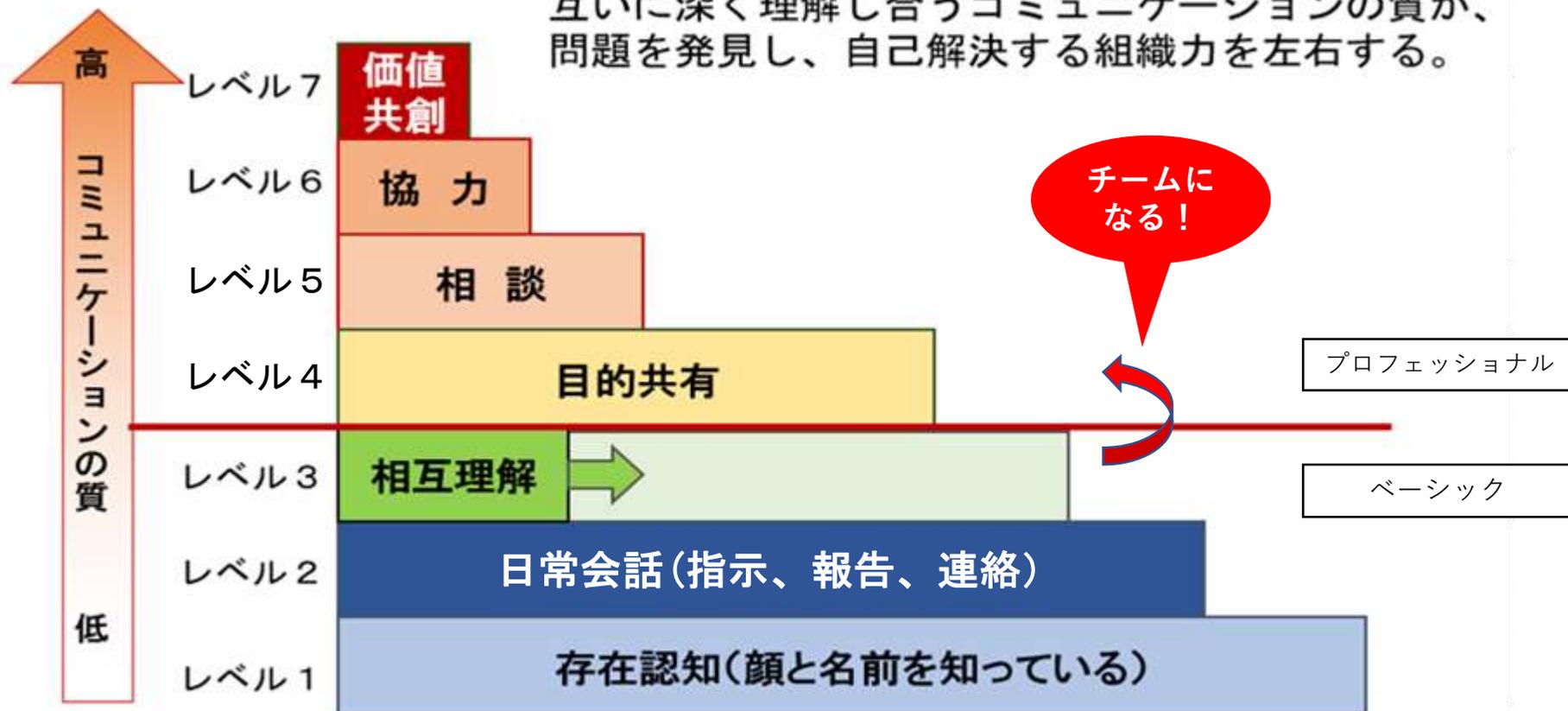
■ 「オフサイトミーティング」 成果と時間のイメージ



■ コミュニケーションレベルの7段階

レベル3：相互理解がキーファクター

互いに深く理解し合うコミュニケーションの質が、問題を発見し、自己解決する組織力を左右する。



オフサイトミーティング「気楽でまじめな話し合い」を目的を持って設計して実施し、対話で出たメンバーの発想や意見を積み重ねながらレベルアップ

【目的】 困りごとを抱えた家庭の課題の連鎖を防ぐため
教育と福祉が連携して一体的に支援をすすめられるような工夫や取組を検討

【方法】 教育と福祉の職員がお互いの理解を深め、
フラットな立場で話し合う場を継続して開催

【時期】 6月23日からスタート
(所要時間 約2～3h 6回開催)

【参加メンバー】 8名

<教育>

【幼小中】 義務教育課 担当指導主事 2名

【教育相談】 教育支援課 教育相談主事 1名

【家庭教育】 生涯学習課 副課長、社会教育主事 1名

<福祉>

【児童福祉】 子ども未来課 課長、副課長、社会福祉主事 1名

<進行> 教育支援課 副課長 (前職：福祉保健総務課)

オフサイト・ミーティングの流れ

「何が出来るか分からないけれど、何かをしたい」

① 人となりを知る「ジブンガタリ」

6/23

② 事実・実態を共有する「モヤモヤガタリ」

7/19、8/17

③ ありたい姿を考える「未来ガタリ」

9/27、11/1

④ やりたいことを考える「アイデアガタリ」

11/30

取り組むべき課題
トライ&エラー&振り返り

ありたい姿を目指す一手、目の前の障害を乗り越える課題を見つける

Stage 1 で描いた 教育と福祉の連携の【ありがたい姿】

のりしろを重ね合えば可能性が生まれる教育と福祉

- ◎ 相手をお互い理解し、普段から関わる接点を持っている
- ◎ 早い段階で、家庭を丸ごと支援し一緒にこどもを守れている→未然防止

今は隙間（認識にミゾ）がある

- ・ 教育と福祉がお互いを知らなさすぎる
- ・ 福祉の支援への抵抗感の強さ
- ・ 家庭への立ち入りにくさ など・・・

**接着点
はないか？**

相互共有→相互理解のための接点をつくるアイデア



- ・ 福祉担当者による現職研修、
合同研修会、相互職場交流など



- ・ 校内ケース会議を対話の場に
(定例開催、SSWの参加必須化)



- ・ 教育と福祉の人事交流

対話の場づくりにもあちこちでチャレンジ！

(こども家庭庁PT、OM体験、研修など)

コミュニケーションレベルの質

価値共創

協力

相談

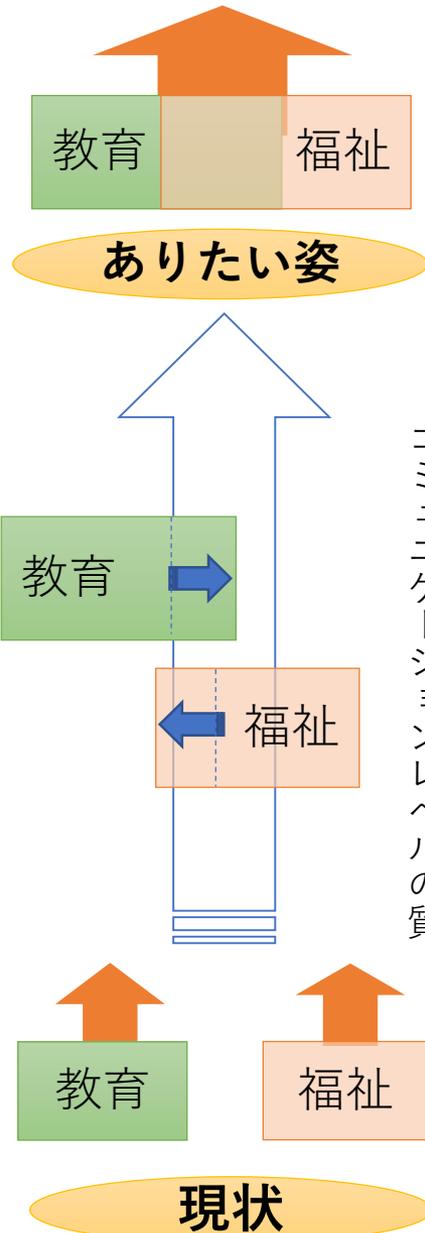
目的共有

相互理解

日常会話

存在認知

コミュニケーションの7段階
(出典：「仕事の価値を高める
会議オフサイトミーティング」)



ちょっとコミュニケーションを広げて関わることから、
互いのいいところが生かし合える組織風土を醸成したい！

「カタリバ」チャレンジ2023 具体策検討編 (Stage 2)

より現場での実践につながるため、「対話の場」で具体的なアイデアを検討
 教育と福祉の連携が特に重要な既存の2つの事業「**児童生徒支援**」「**家庭教育支援**」
 において、教育と福祉の「**接着点**」をつくる

①児童生徒支援チーム

学校（特に県立）と福祉のつながりをよくするために出来ることは？



母子・幼児期から支援することはとても大事



SSWも知ってもらわねば!

学校の限界があるだから外とつながるが大事

②家庭教育支援チーム

家庭教育支援を教育と福祉が協働で実施するために出来ることは？



生徒向けの場+先生向け講座(福祉教育フォーラム)を県立高校で開催

第5回 2/7 第6回 2/21

2チーム合同で実践アイデアをブラッシュアップした方が良い?

「人生のピンチにこそ福祉!」は暗すぎる?

迷走したことは悪いことではない!むしろ、考えている証拠!



生徒は何を知りたい? どんなイメージ? 福祉とスポーツ?

福祉的支援への理解を深める「現職教育」の研修パッケージを考案して小中学校で実践

- ・ 前回の話し合いを肯定
- ・ 再考のやり方も皆で相談
- ・ 学校現場で先生と生徒に「何を伝えたいか」を意識して再度検討

何とか具体的なイメージが共有できた!

★教育と福祉の担当者同士、チームとしてのつながりと参加者の自発的な動きが見え始めた

「カタリバ」チャレンジ2024 実践編 (Stage 3)

「カタリバ」を定期的実施
対話を繰り返しながら内容検討→合意形成

8月、11月

「メニュー研修」実施

12月

「教員との意見交換会」実施

3月

生徒向け授業
実施予定



【家庭教育】 現職教育メニュー

【児童生徒支援】 生徒向けの場合 + 先生向け講座 (仮) 福祉教育フォーラム

現場実践【小中学校】

- (1) 8月9日 御坊小学校 (市主催 研修会)
- (2) 11月25日 那智勝浦町 (県主催 小中全体研修会)

『こどもと家庭に寄り添うために教育と福祉ができること』
～「気づいて、つなぐ」から始めよう～

→実践後の検証と改善で現職教育メニューのモデル化

現場実践【県立高校】 協力：有田中央高校

※11月7日に学校長へ実践協力依頼

→「生徒向けの実施は慎重にすべき」とのアドバイス
現場重視で、フォーラム案を再考

- (1) 12月18日 教員との意見交換会 (現職教育)

『これから社会人となる生徒のために』

- (2) 3月21日 生徒向け福祉教育 第2学年生徒全員

『将来のために、福祉を知ろう』

出来る範囲で
役割分担

8月9日 御坊小学校
研修会 実践メンバー

- 【教育】 教育支援課
生涯学習課 紀南教育事務所
- 【福祉】 社会福祉課 健康推進課
御坊保健所
- 【共生】 こども支援課
多様な生き方支援課

- ・御坊市教委 (教育)総務課、生涯学習課
- ・御坊市福祉部局

11月25日 那智勝浦町
小中全体研修会 実践メンバー

- 【教育】 義務教育課 教育支援課
生涯学習課 紀南教育事務所
- 【福祉】 社会福祉課 健康推進課
新宮保健所
- 【共生】 こども未来課、こども支援課
多様な生き方支援課

- ・那智勝浦町教委、串本町、新宮市
- ・那智勝浦町家庭教育支援チーム

12月18日 有田中央高校
教員との意見交換会 実践メンバー

- 【教育】 教育支援課 紀南教育事務所
生涯学習課
- 【福祉】 社会福祉課 健康推進課
- 【共生】 こども支援課 こども未来課
多様な生き方支援課
- 【オブザーバー】

福祉保健政策局長、こども家庭局長
(教育)総務課

2022

2023

2024

【目的】

こども真ん中
家庭丸ごと
早期支援
未然防止

【課題】

認識に
ミゾあり

「連携」とはいうものの、
具体的には、何をすれば？

教育と福祉の間には、
なにか「壁」がありそう。
それは何かは???

接点を作ろう！

- 共通認識を持てた！
- 課題と目的が明確になった！

・家庭教育支援事業
・児童生徒支援事業

やりたい取組を一緒に考える

- 取組のベースとなる事業を絞り込んだ
- 具体的な実践のアイデアが描けた！

「現職教育」
「福祉を知る授業」
を实践

- 現場の協力を得て実現！
→接点づくりの展開モデルに！

Stage 1

目的の明確化

【関係課 4課】
教育：義務教育課
教育支援課
生涯学習課
福祉：子ども未来課

Stage 2

具体案の検討

【関係課 7課】
教育：義務教育課 教育支援課
生涯学習課
福祉：子ども未来課 福祉保健総務課
健康推進課 児童相談所

Stage 3

トライ&エラー

【関係課 9課】
教育：義務教育課 教育支援課
生涯学習課 紀南教育事務所
福祉：社会福祉課 健康推進課
共生：子ども未来課 子ども支援課
多様な生き方支援課

教育と福祉の のりしろを重ねる

課題と目的を
「探る」からスタート！

- すべては困難をかかえるこどもと家庭のために！
- 意見を交わす、聞く、聞いてもらう、が楽しい！→ ポジティブに取組めた
- 参加者同士のつながりができはじめる→ 自発的な動きも出始めた！

教育と福祉の連携 <市町村への展開>

学校



学校生活に関するこどもの話はよくしているが、家庭に深く踏み込みにくい



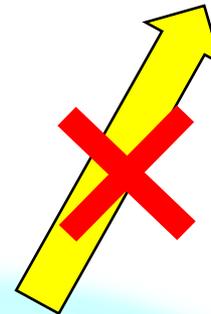
家庭



教育と福祉が連携して支援できるよう関係づくりが必要



こどもや保護者に福祉的な支援が必要な場合があっても、福祉の立場から、直接こどもや保護者へ介入することは難しい



福祉

実践事例 1 (2024年8月9日 御坊市立御坊小学校)



御坊小学校教職員	5名
御坊市福祉部局	5名
県行政関係者 (共生、福祉、教育)	9名

【事例】 (グループワークで検討)

- ・小学6年生男子、一人親家庭
- ・父親は仕事を転々としている
- ・学校を欠席しがち
- ・友達は少ない
- ・登校しても机に突っ伏し、授業中は居眠り
- ・「どうでもええねん。」という声も
- ・深夜に及ぶまでオンラインゲーム
- ・朝食を食べていない

・以前から家庭への教育的、福祉的な支援が必要だと強く感じていました。御坊市でも、是非、訪問型家庭教育支援チームを実現してほしいです。

・家庭への介入が困難。また、異変を感じても明確な報告基準があるわけでもなく難しいため、福祉との接点があればあるほど繋がりが易くなっていると思いました。

・素敵な機会をいただきました。福祉部局の支援が厚く用意されていることに気づきました。つつい、学校が頑張らなくてはと、考えてしまいがちでしたが、困ったら、相談すれば良い。そして、助けてくれると、考えを広く持てるようになりました。

・今回、背景にある家族の問題など、こどもを取り巻く課題を見出す視点を広げることができました。これまでも連携の必要性を感じながら、どの組織が主体となり、どのように連携を図ればよいか、課題提起するのか、それぞれが悩むことがあったかと思えます。それぞれの役割などを考えるよい機会になり、今後の支援体制の充実に期待します。

実践事例 2 (2024年11月25日 那智勝浦町役場)



那智勝浦町教職員	13名
町外の養護教諭	7名
那智勝浦町家庭教育支援チーム員	11名
那智勝浦町行政関係者	5名
町外の行政関係者	8名
県行政関係者 (共生、福祉、教育)	14名

・ふだん教職員と福祉関係者が一緒に語ることがなかなかないので、お互いの思いを伝える場を作っていただいたことが良かったです。

・福祉的な支援を知らなかったため、色んなことができるを知る事ができました。

・教育関係者だけでなく、福祉関係者の方とも事例検討を行うことができたため、貴重な時間となりました。また、この研修会を通じて、知りあったり、連絡先を頂いたりすることもでき、つながりが増えるなど、非常に有意義な研修会となりました。

・今回のような教職員、福祉関係者又家庭訪問支援員等色々な立場の方が一緒に事例検討を通して様々な意見を語り合うことの大切さを痛感しました。色んな解決方法を模索する中で大事なことは、相手の立場に立ち、寄り添う中で心を開いてくれ、一緒に前へ進んでいけるのではないかと思います。様々な機関が連携し共有することの大切さを痛感しました。今後もこのような会合の開催を希望します。

家庭教育支援の取組

県内の家庭教育支援チーム（文部科学省登録済）

- 橋本市家庭教育支援チーム（ヘスティア）
- 湯浅町家庭教育支援チーム（とらいあんぐる）
- 印南町家庭教育支援チーム（いなみっ子応援隊）
- 岩出市家庭教育支援チーム（H u g 育（ハグハグ））
- 那智勝浦町家庭教育支援チーム（「ほっとほーむ」）
- 日高川町家庭教育支援チーム（子育てサポートいきいき・優・友）
- 日高川町家庭教育支援チーム（ほっと）
- 御坊市家庭教育支援チーム（ハッピーママライフ「HML」）
- 古座川町家庭教育支援チーム（さくらファイブ✿）
- 九度山町家庭教育支援チーム（きらら）
- 由良町家庭教育支援チーム（ゆらっこハート）
- 海南市家庭教育支援チーム（かいなんPOT）
- 有田市家庭教育支援チーム（みらい）

R6.12.01現在



保護者同士の交流



親子で学べる講座



訪問型家庭教育支援チームの仕組み



情報紙の発行、家庭訪問

学生時代



就職



子育て



今は学校と
つながって
いる



学校

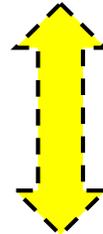
②授業
実践



①現職教育



将来のために、
福祉を知り、
福祉関係者とつながる
機会が必要



福祉

実践事例3 (2024年12月18日 県立有田中央高校)



有田中央高校の教職員 37名
県行政関係者（共生、福祉、教育）14名

・やはり、こどもたちの課題を学校だけで解決することは困難だと認識できた。どのような状況のこどももサポートできる仕組みが必要だと思う。

・社会全体の構造的な矛盾が、保護者とこどもの生活にひずみをもたらしていると思います。教育と福祉の連携には大いに賛成です。学校現場の声と、福祉制度の専門家が結びつくことが、少しでも多くの保護者や生徒を支援につなげられると思います。

・多岐に渡る問題（ヤングケアラー、人口減少等）に直面しつつも、和歌山県の教育の発展のために様々な取り組みが日々行われていることを、現職教育を通じて知ることができました。特に、後半の和歌山県庁の方々と交えたグループワークでは、教育現場に近い立場にいる教員たちが考える問題と、県庁の方々が発表された問題意識の双方の違いを知ることができ、興味深く思いました。

・校内に居場所カフェのようなコーナーや、出張 **with you** (←勝手に名付けました) などをつくって、学生のうちから福祉を知る機会があればいいなと思います。

【成果】

- 県、県教委、市町村、学校の間で、教育と福祉の接点づくりが実現！
- 知事部局職員と教育庁職員の間で、接点づくり効果を実感！
 - ➔ 「カタリバ」での対話・意見交換が職員個々の**モチベーションアップ**に！
 - ➔ 教育と福祉の担当者同士、場を重ねるごとに、理解が深まり、やがて小さいながらもメンバーが**自発的に行動**
(OMでコミュニケーションレベルの向上が図れることも確認できた)

【気づき】

- 対話と小さな実践によるプロセスを積み重ねることが大事
 - ➔ 「沈黙」や「迷走」も乗り越えられたのは「**信頼関係**」あってこそ
- 取組テーマと目的が定まっていることが大事 ➔ **目的共有**で一致団結
- 所属や上役の理解・協力を得ることが大事 ➔ **安心**して場に参加
- 個のつながりづくりが大事 ➔ 組織がつながるには、まず、**個人**から
- 楽しみながらやることが大事 ➔ 義務感ではなく**使命感**で仕事ができる